

●水環境・河川・流域（1） （1-A-09-1～1-A-10-2）

本セッションでは、河川環境中の微量化学物質に関して6件の発表がなされた。

1-A-09-1は、防腐剤のパラベンの河川中での動態とセスジユスリカを用いた生態リスク評価の結果の報告である。環境濃度だけでなく、その影響までを評価した点で価値がある。

1-A-09-2は、福岡市内の河川や海域でのPFCsの汚染実態の報告であり、都市域でのPFCsの汚染を知る上で有用である。今後は、検出濃度の評価や水環境中での動態などに取り組んで頂きたい。

1-A-09-3は、利根川の農薬汚染を通年にわたり詳細に調査したものである。今後は、調査結果を水生生物への影響の視点で検討することに期待したい。

1-A-09-4は、国土交通省の一級河川のダイオキシン類調査結果をまとめて報告したものである。行政が実施したモニタリング結果は、学会等であまり発表されることがなく、情報発信を含めて意味がある。行政には大量のデータが存在するため、同様な発表がなされることを期待する。

1-A-10-1は、新型インフルエンザが発生した今年度の抗インフルエンザ薬の河川濃度に関する報告である。濃度と患者数が平行な関係であった事が興味深かった。

1-A-10-2は、有機リン農薬のフェニトロチオンとその分解物の変異原性物質生成能を調べた報告である。分解物の生成能が親物質より大きく、河川水中の全生成能の1割を占めていた。

化学物質はリスクの視点で取り組む必要があり、環境汚染実態に加えて検出値の持つ意味、検出値の評価にもっとチャレンジすべき時期に来ていると感じた。

（北九州市立大・国際環境工 門上 希和夫）